

子どもを「人間としてみる」 保育とは

田園調布学園大学大学院
佐伯 胖

神奈川県私幼蓮講義第3回要約版

1

「人間て、何だ」から考える

ヒューマン なぜ人間になれたのか
2012.1.22 NHKスペシャルより

2

人間は、苦しんでいる**他者を**
気遣い、援助することを、
「よい」ことだとする。

3

エール大学ハムリン (J. J. Hamlin) らの実験

[援助するブロックvs意地悪するブロック](#)

[どちらを選ぶか](#)

<http://www.yale.edu/infantlab/socialevaluation/Helper-Hinderer.html>

4

4

赤ちゃんが、 (自分より若い) 赤ちゃんを 「保育」する

北田沙也加 (2018) 異年齢保育における幼児の乳児に対する
養育的行動. 『保育学研究』第56巻第2号, 51-62.

9

よく見られる幼児の養育的行動

- 0～4歳児がともに過ごす保育園で、同じクラスの子が自分のおもちゃを黙ってもっていきと怒るが、相手が1歳児だと、自分の使っていたおもちゃを渡し、関わりをもとうとした (3歳男児)。
- 2歳児に靴を履かせようとしたり、遊んでいるときに抱っこしようとする (4歳女児)。
- 一般に、幼児は2歳頃から、面識の有無に拘わらず、自分より若い乳児に対して、なでる、物を与える、世話をするなどの養育的行動が見られる。

10

赤ちゃんは、 保育する**母親**を**気遣う**

11

保育に協力する赤ちゃん

- 生後2ヶ月～：抱き上げを予期して、母親の顔をみつめ、
 - ① 脚伸ばし、脚上げ、脚固め
 - ② 腕広げ、後ろに伸ばす
 - ③ 首持ち上げ、顎引き

Vasdevi Reddy基調講演

[「乳児期におけるかかわることと心への気づき」](#)

中山人間科学振興財団創立25周年記念シンポジウム：

人間科学における二人称的アプローチ、神田学士会館、2016.10.29

12

幼児（赤ちゃん）は

人間は、苦しんでいる他者を
気遣い、援助することを、
「よい」ことだとする。

それを、当たり前のように、
しようとしている。

それを、おとなたち（保育者、
教師、研究者）は、なぜか、
完全に無視してきた。

13

私たちは、子どもを
人間としてみてこなかった。

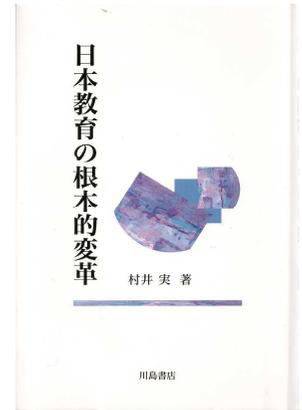
14

子どもを、
「**教える対象として**」みてきた。

15

慶應義塾大学名誉教授
村井 実氏の提言：

『日本教育の根本的変革』
川島書店、2013年



日本教育の根本的変革
村井実 著
川島書店

16

インターネットと教育シンポジウム

日時：平成15年12月5日（金）

場所：佐賀大学理工学部都市工学科大講義室

主催：(株)佐賀新聞社、佐賀大学、NetComさが推進協議会

基調講演

「目指すところは自由な学び」

慶應義塾大学名誉教授 村井 実

17

17

- 明治初期、自由な学びは日本中の寺子屋にあった。子どもたちは、「学びたい」ことを、「学びたい」ときに、「学びたい」ところで、自由に学んでいた。
- ところが国は学校を作り、「学ぶべきこと」を定め、それを卒業しないと一人前の人間として認めないという制度を作った。
- それを代表した人物が大久保利通であり、明治2年「政府の体裁に関する権限書」を書いた。その中の印象的な言葉で「日本国民は西洋国民と比べて無知蒙昧（野蛮）、無気無力」であったため学校という制度を作って、教化することを提案した。
- 日本はその後現在までその通りの道を辿ってきている。ピラミッド型の学校制度で上に登れたら偉いというシステムを作り、日本を近代化しようとするものであった。
- 大久保利通は殺害される数日前に「自分のやっていることは変則変態なのだが、今の日本を近代化するには仕方がないことだった」と言っていた。もしそのまま生きていたら本物の教育に変えていこうと思っただけかもしれないが、その後も学校システムはそのままである。

18

18

- 日本は戦争に負けたが教育は変わっていない。我々国民も慣れていて明治以降130年間変わらない。いい成績をとることで人間として認められるという社会が続いてきた。
- 実は、学校で成績だけ良くて高収入を得ている人ほど、人間としてあてにならない。人間らしい人間が今の世の中にいなくなるのは当然ではないかと思う。大久保利通や西郷隆盛は学校に行かなくても立派な人間に成長した。
- 学びたいことが自由に学べないのが、今の日本の問題であり、大なり小なり世界中もそういう問題にぶつかっている。自由を生かして勉強できるチャンスは少なくなってきた。それは民主的國家から離れてきている。世界中が國家の利益を利用し國益をすすめるだけ、世界はおかしくなる。明治時代、日本は寺子屋をもつ獨特の國家だったが、今はかつてのそゆうものはないだろう。海外もそゆうである。ナショナリズムが膨張して一人一人の人間性が失われているのは大問題である。

ある出版社から「いま学校に何が必要か？」という題でコラムを依頼されたが、それは「教えないということだ」と書いた。「教えない覚悟を日本中の学校がすること」だと。

19

19

前々回（第一回）より

20

しかし、
我が国の教育では、
くりかえし
「のぞましい姿」（「期待される人間像」）を
「教育すべきこと」としてきた。

21

21

本田由紀を読む

本田由紀（2020）『教育は何を評価してきたのか』岩波新書



ココ！→

22

22

「学制」公布からの学校教育体制

- 1872年 「学制」
 - 「一般の人民華土族農工商及び女子必ず邑に富岳の戸なく家に富岳の人かからしめん事」
- 1879年 教育令
- 1886年 小学校令、中学校令、師範学校・帝国大学令
(但し、東京大学は1877年創立)
- 1889年 **大日本帝国憲法発布**
- 1890年 第二次小学校令、実業補習学校の制度化
教育勅語の制定と下賜
- 1894年 高等学校令
- 1899年 実業学校令、高等女学校令、市立学校令
1900年（明治33年）の学校系統

23

23

我が国の教育における 「人間の望ましさ」を支える二つの評価軸

- **垂直的序列化**：相対的で一元的な「能力」に基づく選抜・選別・格づけ。
- **水平的画一化**：特定のふるまい方や考え方を全体に要請する圧力。
 - 「**教化**」の形をとる。
 - 「生きる力」、「人間力」、など。
 - 「態度」、「資質」と不可分。
 - 規則を重んじる
自ら学ぶ意欲、社会の変化に主体的に対応。

教育勅語がルーツ

24

24

幼児期の終わりまでに育てたい「10の姿」

1. 健康な心と体
2. 自立心
3. 協同性
4. 道徳性・規範意識の芽生え
5. 社会生活の関わり
6. 思考力の芽生え
7. 自然との関わり、生命尊重
8. 数量、図形、文字等への関心、感覚
9. 言葉による伝え合い
10. 豊かな感性と表現

25

25

子どもを「人間としてみない」
もう一つのルーツ

「発達」というトラウマ
保育とは、発達の支援か

[H29幼稚園教育要領](#)

[H30幼稚園教育要領解説](#)

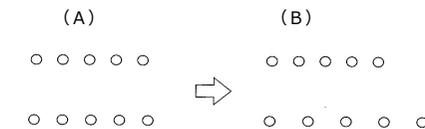
26

「発達心理学」が見てきたこと
～ピアジェ心理学の保存課題～

27

27

ピアジェの「数の保存」実験



- 4歳未満の子どもに、(A)のようにならべたおはじきをみせて、「上のならびと下のならびと、どちらの方がたくさんですか、それとも同じですか。」とたずねると、「同じ」と答える。
- そこで、本人のみているところで(B)のように広げて、「こんどは、どちらの方がたくさんですか、それとも同じですか。」とたずねると、ほとんどの子どもは、「こっちの方がたくさん。」といって下のならびを指さす。

28

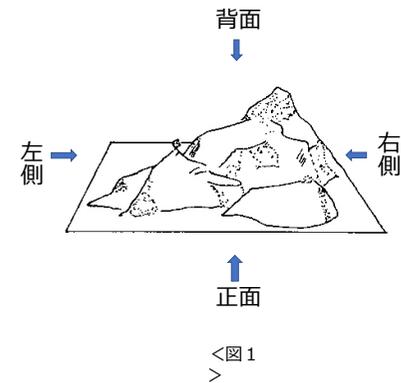
もうひとつの「数の保存」実験



- 4歳未満の子どもに、(A)のようにならべたおはじきをみせて、実験者Aが「上のならびと下のならびと、どちらの方がたくさんですか、それとも同じですか。」とたずねると、「同じ」と答える。
- そこで、本人のみているところで(B)のように広げたとき、たまたま、電話がかかってきたと言うことで、「ちょっと待っててね。」といって実験者Aは席を外す。
- 実験者Bが通りかかって、「あれ、二つの列のどちらの方がたくさんかしら?」とたずねる。
- 子どもはさりげなく、「同じだよ。」と答える。

29

標準「三つ山問題」



- 幼児の目の前に<図1>のような3つの山の模型が置かれる。
- 上から見た配置は<図2>であるが、幼児はあくまで<図1>の模型を正面から見るだけである。

30

30

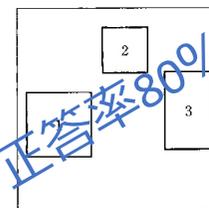
標準「三つ山問題」(つづき)

- 実験者は人形を、山の模型の正面、左側、右側、背面(向かい側)に移動させて、
- 人形がそれぞれの地点からの山の模型を見た場面について、4つの方向(正面、左側、右側、背面)から見たスケッチ画のうちの1枚を選ばせた。
- 結果：4～5歳児は、すべて「正面からのスケッチ」(今自分が見えてる様子)を選んだ。7～12歳児は、練習しているうちに、正答できるようになって行った。

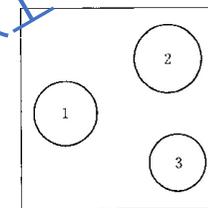
31

31

ボークの実験(3～4歳児)

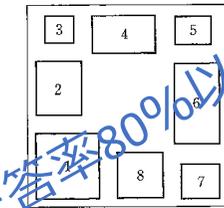


- 帆船
- 馬と牛
- 家



標準「三つ山問題」
正答率：

3歳児42%
4歳児67%



- カウボーイ、インディアン、木
- 湖に泳いでいるアヒル
- 風車
- ワゴンを引く牛
- 犬と犬小屋
- 家畜の入った納屋と百姓
- ウサギと豚の入った豚小屋

32

では、なぜ、従来の（「ピアジェ型」）の実験では、低年齢の子どもは「無能」に見えたのか。

- 子どもは、オトナ（実験者）に「あわせよう」としていた。
- オトナ＝「いっしょにあそんでくれる、信頼できる他者」（まさか、このワタシを「試している」とは思わない!）



• つまり、子どもは他者を「共感的に」みているのではないか。

33

いわゆる「保存課題」のねらい

- 発達段階（＝内的シエマ）の形成段階を幼児の問題解決行動の観察から同定
 - 子どもの行動観察から、その段階で形成されているであろうシエマを予想する。
 - 「シエマ」理論から、この段階ではこの問題解決は無理、この問題解決は可能ということを予測し、それを実験的に検証する。
- シエマの例（**科学者の思考を規範にして**）
 - 自己中心性（自分の視点に固執）→「三ツ山」問題
 - 数のシエマ（一対一対応で“多い”、“少ない”を判断）
 - →数の保存実験
 - 操作の可逆性（心的に「もとに戻す」）→量の保存

34

34

昭和39年度版から平成元年版への幼稚園教育要領の転換

内田伸子著『幼児心理学への招待』サイエンス社、1989年

表3 発達観の転換 (内田、1989を一部加筆)

ピアジェ理論の発達観	新しい発達観
<ul style="list-style-type: none"> • たった1人で知識を構成する。 • 幼児は自己中心的な思考をするため、他者の立場を考えられない。 • 人は合理主義的な思考ができる。 • 発達には漸進的に進行する。 • 個人的な制約を受ける。 (→個人は物理的環境と相互作用) • 1人で知識を発見・形成していく。 	<ul style="list-style-type: none"> • 他者との相互交渉のなかで知識を構成する。 • 幼児でも課題の馴染み深さ、日常的文脈などの条件下では、他者の立場を考えられる。 • 人は常に合理的な思考をするわけではない。 • 発達は新しい枠組みの獲得により質的転換がおこるたび重なる反復や逆転がある。 • 他者との関係による制約を受ける。 (→他者との相互作用により発達) • 知識の形成は個人を取りまく社会・文化抜きにはなされない。
↓	↓
子どもは「孤独な科学者」である。	子どもは「社会的な法律家」である。

▶ 発達とは、個々の子どもの活動から生み出され、子どもから大人へと一貫性に進む現象であるという見方から、社会のなかで様々な人々と相互交渉する中で生み出され、さまざまな方向に進んでいくという見方への転換を示している。

中野茂（1991）乳幼児の発達と保育内容 森上史郎・吉村真理子編『保育内容総論』（保育講座②）、ミネルヴァ書房より

35

35